

表彰式

主催者挨拶

公益財団法人

日本美術刀剣保存協会

会長 小野 裕

会長の小野でございます。まずは新作名刀展に入賞及び入選された皆様には誠にありがとうございます。

また、お忙しいなか審査にご尽力いただいた審査員の皆様にも、この場をお借りし心より御礼申し上げます。

刀職の皆様が日々精進され、ご努力を積まれた一年の発表の場であるこの新作名刀展の表彰式は、私達にとっても気持ちの引き締まる思いがあります。昨今の景気低迷のあおりを受けている刀職に携わる皆様が、困難に負けずに出品されることには心より敬服いたすところであります。

特にさきほど事務局から経過報告がありました。本年は、作刀及び彫金部門の出品数が三〇パーセント増になっており、皆様のご努力に報いるよう、我々も既成觀念にとらわれずに活動していきたいと思えます。

そして、皆様ご承知のとおり、本年

表彰式会場



の新作名刀展から高松宮記念賞が再開されました。これは多くの方々のご支援をいただいで、協会が信頼を回復した証と言えらると思えます。

このご支援には刀職の方々、日本刀制作に対する気概に負うところ大であります。私は会長として、本来の賞にはありませんが、永年力作を出品されてきた山口清房刀匠、宗勉刀匠、古川清行刀匠三名の無鑑査の方々に功労者賞をお贈りするにしております。

皆様におかれましては今後共、ご精進いただき、現代の名刀、名品を生み出していただきますようお願いし、私の挨拶といたします。

作刀の部講評・吉原義人氏



作刀の部 審査員講評

吉原 義人

皆さん総体に仕上がりが出来はよくなっております。

今回は、焼刃について少し申し上げたいことがあります。入賞者のなかで、焼刃土を置かずにそのまま焼き入れをする、いわゆる「はだか焼」を焼いて出品している方がいました。はだか焼の刃文は、水中に入れた刀身から発生する気泡によつて冷却温度が調節され刃文が出来るもので、全く作者の美意識の入れられない刃文です。

焼刃というのは作家の個性が一番表現される場所です。長光も景光もそれぞれちゃんとした個性的な刃を焼いています。そういう意味で、はだか焼では作家自身の個性が出ないと思いま

す。今年はいい賞に入ったからといって、皆がこれをやったら、刀の個性がなくなってしまう。作家としての心構えをしっかりと持って、どんなものでもきちんと焼刃土を置いて焼けば、自ずと個性的な刀に出来上がります。来年からは皆さんそれぞれが、そういったことを心掛けて作刀するよう、心から願っています。

刀身彫の部 審査員講評

柳村 仙寿

個々の講評の前に、思うことを一言お伝えしたいと思います。

刀身彫というのは、刀があつての作品です。なので、その刀との調和であつたり、バランスであつたりと、ある程度の制約があります。したがつて、たとえ図柄が決まっていたとしても、刀と向き合えばまた違つてくるという表現の難しさや技術力は計り知れないと思えます。

その上に他の刀剣関係の出品と違って、刀を買い、研ぎ、錨、鞘とお金がかかるため、求める方が決まつていないと出品しづらいという事情があり、そのことが出品数の少ない原因の一つだと考えられます。

今後、刀匠の方で自身彫りが出来る

人も是非刀身彫にも出品してほしいと思います。

彫金の部 審査員講評

萩原 守

彫金の部講評・萩原守氏

では講評をさせていただきます。
優秀賞の柏木さん。表の見返り龍は力強く、毛彫りも磨きも丁寧でよく出来ていると思いました。しかし、裏の梵字の大きさに違和感を感じました。裏だからこれ位で、ではなくやはり表とのバランスを考えて、この場合は蓮台、護摩箸、梵字にすればもつとよくなったと思います。

努力賞の片山さん。樋中の倶利伽羅彫りという難しいものに挑戦し、隅々までタガネが入りよく彫っているといます。しかし、彫りが小さいので、ウロコの動きが解りにくいために身体の躍動が余り感じられず、迫力に欠けてしまったのが残念なところです。もう少し小龍景光の作品から学んでほしいと思います。

もう一人、努力賞の入江さん。風神・雷神を小さな短刀に彫っていました。そのため、構図の納め方に大変無理があると感じました。題材を考える時、やはり刀や短刀の大きさに合っているかどうか、バランスを考えて彫るよう心がけてください。

審査を終え、全体に言えることは、もう少し技術を上げてほしいというのが私の率直な感想です。

本日はご入賞、ご入選おめでとうございます。現在の伝統工芸界ではさまざまな解釈のもとに作品を制作し、評価しております。

西洋風に考えて、真似をすることはいけない、というのも一つの見識でしょうが、古来我が国の伝統継承は手本を真似して、その域に達するまで技術を習得し、写し取ることで範とする作者の境地を自分なりに受け継ぎ、それから自己の思いを如何に発展させるかということが、日本の芸術や芸能の文化そのものの質であります。

ですから、日本の芸には流派があるのです。その流儀から新しく万人が認める流派を興すには、弟子が師匠の域に達し、さらに師匠を超えて自流を確立しなければなりません。それを念頭に置き、当協会においては、伝統的な「用即美」の技術を基本とし、かつ画題の選択、地鉄の処理、彫り口の正確さ、色上げや錆付けなど細部の仕上げ、全体の均整などを主なる基準として選定を行っております。

日本刀は武士や有力者、有識者における身分の証であり、その日本刀を装う拵は人品や分限の証明となるのです。



その拵を形成しているのが刀装具で、鐔は拵の顔であり、各々の刀装具は要所要所を彩るものであります。

刀は拵の中に納まつておりますので、持ち主の人品、趣味、教養、そして財力は拵を見れば有識者には一目で解るのです。ですから、持ち主は好み、感性、考え方などを具現したさまざまな作柄の刀装具を蒐集したり注文し、取り揃えて拵を纏め上げており、その刀装具は様式と品格に重きをおいているのです。したがって、刀装具の制作にあたりましては、古作の様式や品格を重視してくださることを望みます。拵の基本理念を基に技術を習得し、自己の作風を確立して現代の名作を作り上げてほしいと念願しております。

今回も皆様それぞれに工夫を凝らして制作されている作品を多く見受けました。地金を探求し新機軸を狙った作

品、古作に倣いながらも自己の思いを加味した作品など、工夫に心血を注いだ作品を拝見するにつけ、いろいろな制約のあるなかで作品制作にあたるのですから、そのご苦労の程を感じました。先人たちが千思万考して自流を確立し、すべて出し尽くされた感も否めないように思われますが、刀装具芸術の世界はまだ開拓できる余地が残されております。

但し、自流を工夫して自己を主張しても、人の心を打つ作品でなければなりません。人の心を打つ作品とは、数多くの刀装具を見て鑑賞眼を高めていくと自ずから解ってくるはずです。

当協会歴代の出品作品には自流を確立し、人々の心を打つ作品もあります。もちろん、古作には長い時代を通して人々を魅了し続けてきた優れた作品、つまり優れた教材が数多く残されておりますので、それらを自家薬籠中のものとして制作に励んでください。

さて今回の出品総数は、無鑑査出品三点を含めて二十四点ございました。なかでも素晴らしい象嵌技術を駆使した鐔と、透かしの配置が絶妙で優れた造形の鐔は、二枚とも出色の出来栄であり、これまでの努力が花開いたものと賛美の拍手を贈りたいと思います。他の皆様方もこの二枚の鐔や無鑑査作

品に追い付け追い越せの意気込みをも
つて、これからの作品制作に取り組ん
でくださることを切望します。
今後さらなる精進を願います。

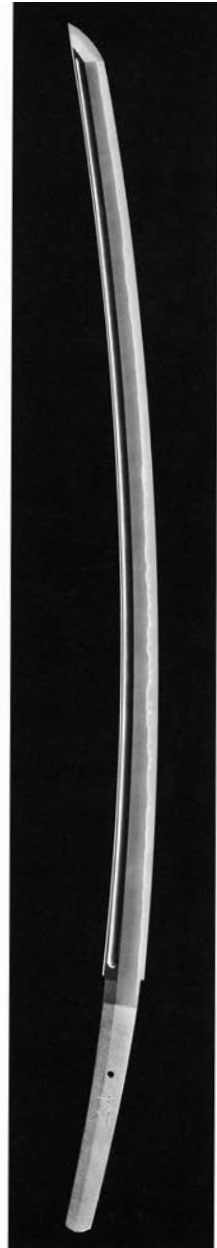
答辞 受賞者代表 久保善博

新緑の候、ここに平成27年新作名刀
展の表彰式をかくも盛大に執り行つて
いただき、誠にありがとうございます。
ご来賓の諸先生方におかれましては、
ご多用にもかかわらずご列席を賜りま
した上に、ご祝辞の数々をいただきま
したこと厚く御礼申し上げます。また、
関係各位の皆様温かいご指導とご配
慮に対して重ねて御礼申し上げます。
今年には戦後70年の節目の年にあたり
ます。私たちの製作する現代刀も、日
本の復興とともに歩んできました。戦
後の刀鍛冶たちは刀を作れない苦難の
時期を過ごし、玉鋼不足にも苦しみま
した。しかしその後、日本刀を愛する
先輩方が、今日のような新作刀を発表
する場を設けてくださり、さらにたた
ら製鉄の再現に取り組んでくださった
お蔭で、今日私たちは材料の心配をす
ることなく、思う存分刀を作り発表す
ることが出来ています。

いまから50年前、ちょうど東京オリ
ンピックの頃は私は生まれました。そ

〔高松宮記念賞〕

太刀 銘 善博



広島県 久保善博



のオリンピックが五年後再び東京で開
催されます。これは、日本刀文化の素
晴らしさを世界に向けて発信する絶好
のチャンスでもあります。

私は近い将来、日本刀とそれに関わ
る職人たちの手仕事の世界無形文化遺
産に登録されることを切に願っていま
す。そして、それだけの価値が日本刀

にはあると強く信じています。そのた
めには、日本刀に関わる職人たちと刀

を愛する人たちが一致団結して取り組
んでいかなうてはいけません。

現代刀は残念ながら古名刀の美しさ
をまだ再現することは出来ていません。
しかし、長い間再現不可能といわれて
来た映りに関しては、近年の刀鍛冶の
努力は評価出来るところまで達してい
ると私は感じています。

この度の高松宮記念賞の復活は、私
たち刀鍛冶にとって近年にない最高の

知らせとなりました。今後、この賞に
恥じぬよう日々研鑽していく所存です。

ご来賓の諸先生方関係各位の皆様方
におかれましては、今後ともなお一層
のご指導ご鞭撻を賜りますよう、心か
らお願い申し上げます。甚だ簡単では
ございますが、御礼の言葉とさせてい
ただきます。

本日は誠にありがとうございます。

平成27年4月28日

受賞のことは

作刀の部

日本刀文化の
将来のために

久保善博

私が刀鍛冶を志したのは今から二十六年以上も昔、大学でバイオの研究をしていた頃でした。テレビのドキュメンタリー番組で、人間国宝の隅谷正峯特賞受賞者（撮影・トム岸田）



〔公益財団法人日本美術刀剣保存協会賞〕
刀 銘 上州住恒厳作・平成二十七年三月日

群馬県 高橋 祐哉



氏が、「鎌倉時代の名刀は一生かけてもできなかった」と話しているのを聞き、それならこの手で古名刀を再現したいと思ひ、刀鍛冶になることを決意しました。科学技術が発達した今日、なぜ七百年前の刀が再現できないのだろうかと疑問を感じると同時に、そのようなことに情熱を燃やしている人間がいることに深い感動を覚えたのです。

平成元年大学院修了後、両親の大反対を押し切って吉原義人師に入門しました。修業当初私は、刀造りを学べる喜びに満ち溢れていました。しかしすぐに、刀剣界において現代刀の評価が極めて低いという現実を知ることにな

ります。鑑定会などで現代刀を見下す愛刀家を幾度となく目にしました。確かに、長い歴史のある古刀に比べたら、現代刀がまだまだ及ばないのは事実でしょう。しかし、人生を掛けようと飛び込んだ世界が、これ程まで蔑まれていくという現実にはとても悲しくなりました。侍がいなくなり百数十年、愛刀家や刀剣商から相手にされていない現代刀を、今の時代に造る意義があるのだろうか、私は長い間悩んでいました。そんな考えから解放されたのは、十年ほど前にパリで現代刀の展示会をした時でした。ヨーロッパの人たちが、「こんな素晴らしい工芸品は見

イスキー造りは無理だったんだよ」と言われたことではないでしょうか。ウイスキー造りが始まって百年、今では日本のウイスキーは世界で高い評価を受けています。これは、ウイスキー造りに掛けた職人たちの情熱だけでなく、その可能性を信じ応援し続けた人たちの存在なしでは成し得なかったことでしょう。

同じように、後世に残る名刀も刀鍛冶の努力だけでは造れないのです。限られた材料で途絶えた技術を再現しながら、経済的にも恵まれない状況で刀を造り続けている現代の刀鍛冶にも、エリーのように温かく応援してくれる人が必要なのです。日本刀文化の将来のためにも、今後現代刀の理解者が少しでも増えることを私は望んでいます。そして、決して、「古名刀の再現なんか出来る訳がない！」とは言って欲しくありません。(高松宮記念賞受賞)

日々鍛錬

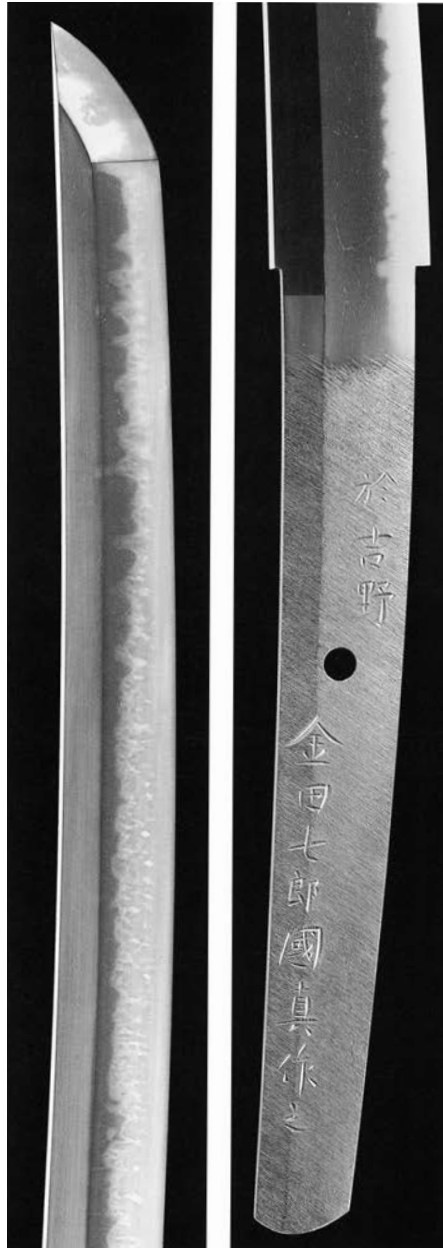
高橋 祐哉
(恒蔵)

日本美術刀剣保存協会会長賞をいただきますありがとうございます。長年にわ

〔薫山賞・新人賞〕

大刀 銘 於吉野金田七郎國真作之・平成二十七年三月

奈良県 金田 達吉



たりご指導ご支援くださいます皆様
に厚く御礼申し上げます。また職方
の皆様へ感謝を申し上げます。

今回の刀は締切当日に何とか仕上が
ったので、「間に合った」という気持
ちが強いですが、挑戦している作風を
評価していただき嬉しかったです。

目標としているのは、鉄の自由な変
化が違和感なく現れた刀、と表現する
のが近いと思いますが、自然な雰囲気
に見える刀はどうすれば出来るのか、
考えれば考えるほど作意の深さを恐ろ
しく感じます。

何とか魅力的な刀を造りたいと鍛錬

しても至らぬもので、なかなか鉄の気
持ちを感じ取ることが出来ず申し訳な
く思う日々ですが、諦めず、力の限り
を尽くして作刀していきます。

初めての刀

金田 達吉
(國真)

この度は薫山賞並びに新人賞をいた
だき、本当にありがとうございます。
まさか初出品で薫山賞をいただける

などとは夢にも思わず、未だに実感が
持てずにいます。

高校を卒業して河内國平師の元に入
門して早や七年、長いようで短く、し
かし毎日朝から晩までが忙しく、充実
した日々でした。

高校時代にやりたいことが見つから
ず、自分が将来どうしたいのか、どう
なりたいたのか悩んでいたときに出会っ
た親方の本『日本刀の魅力』のおかげ
で私は刀の世界を知り、刀鍛冶という
仕事を知りました。

刀のことなど何ひとつとして知らな
かった私に一から、刀とは何か、職人

とは何か、弟子とは何かを叩きこんでくれた親方と奥さん。「自分がやりたことならばやればいい」と、反対することもなく背中を押してくれ、毎年のように吉野に励ましに来てくれた祖母と両親。何か機会がある度に弟子としての心構えや仕事に関するアドバイスをしてくれた兄弟子の高見國一さん、色々な人のおかげで今の私があり、そして今回の受賞に繋がったのだと思います。

今回の出品刀は初めて自分のものを下鍛えから造り込み、素延べ、火造り、焼入れ、鍛冶押しをしました。七年の間で、ひと通りの仕事は親方の弟子として経験してきてはいましたが、いざ一人で刀を作るとなるとなかなか思うようにいかず、記憶力の悪さと仕事に対する自分の考えの甘さを痛感しました。親方の教えに従いながらなんとか形にはなりましたが、自分で作っておきながら自分の力で作り上げた刀だと自信をもって言えるものではないような、そんな複雑な心境です。

来年こそは「これが自分の考えで作った刀だ！」と胸を張ってコンクールに挑めるよう、また今回の結果に驕ることなく、より良い刀を作れるようにひとつひとつの仕事を見直し、努力していきたいと思えます。

〔寒山賞〕

太刀 銘 播磨國住高見國一作之・平成二十七年春雷

兵庫県 高見 一良



職人としても人間としてもまだまだ未熟者ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いします。

自分を磨く

高見一良

(國一)

この度、久々に特賞をいただき嬉しく思っています。この一年は思いがけず病気になるってしまい、いつものように槌を振るうことが出来ない時期がありました。今思うとそんな中、休むこ

となく十六回目の出品が出来ただけでも運があつたのだと思っています。家族、親方、そしてご心配おかけしました皆様にご心配おかけします。

今年の出品刀について、一番嬉しかったことがあります。それは、刀が研ぎ上がった時、研ぎ師の井上聡さんから「この刀が欲しいんだけど」と言われたことです。今までも多くの刀を研いでもらい、「良くできています」「僕がいいと思う」「僕は好きだけど」という言葉がありました。しかし、「本当に欲しい」と言ってくれたのは初めてで、刀鍛冶としてこれほど嬉しいことはありませんでした。

日本刀は実に奥が深く難しいです。名刀と呼ばれる刀の良さが本当にどれだけ理解でき自分が解っているのか。品格はどのように備わっているのか。

近年、人生の大先輩達から可愛がつてもらえるようになり、小道具や焼き物、書などを勉強させていただけられるようになりました。最後に刀も拝見させていただきますが名品ばかりです。「すごい！」と声を出し感激しますので、私も心の奥底から何かを感じているのだと思います。名品には同じものが二つとありませんが、良いものを自然と感じ取ることが出来るようになって来ました。人の声に流されることなく、ど

んな作品であっても自分の感性で作品を眺めながら色々な話が出来るように、日々の生活の中で、季節毎に変化する山の色や鳥たちの囀る声を愛おしみ、人間らしく感性を養っていきたいです。

今回、恒例の勉強会においては貴協会からのご厚意により、出品者の手本、勉強となる参考刀を並べていただけましたことに深く感謝しています。結果が全てではありませんが、これからも応援して下さる皆様の期待に少しでも応えることが出来るように日々努力し、良い作品が出来るように頑張っていきます。

最後になりましたが、勇気を出し作風を変えたことにご理解くださり、高く評価して下さった審査委員の皆様方に心よりお礼申し上げます。

(寒山賞受賞)

出合いに感謝

山副公輔

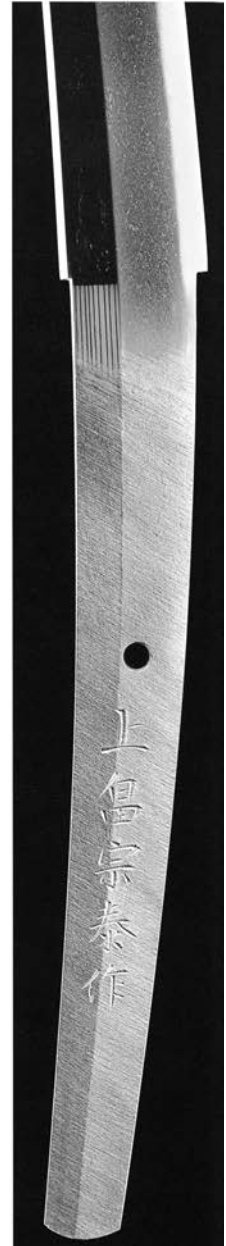
「今年は出品を諦めます」

平成二十四年に文化庁監修の刀匠技術保存研修会において修了証書をいただいていたから、二十五年、二十六年と新

(寒山賞)

太刀 銘 上島宗泰作・平成廿七年春吉日

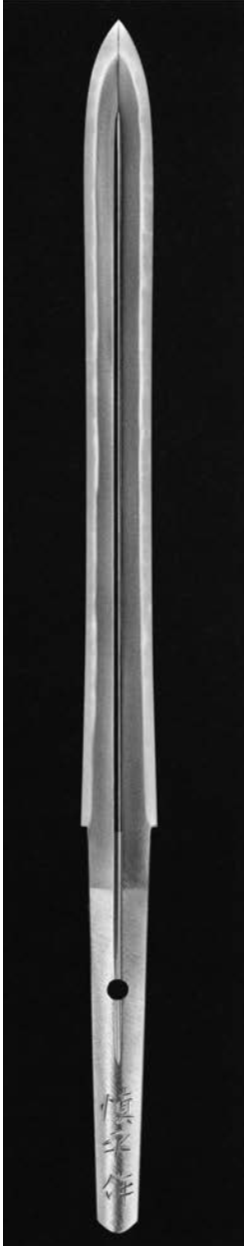
埼玉県 上島 誠



(公益財団法人日本美術刀剣保存協会会長賞)

剣 銘 慎平作・平成二十七年二月日

栃木県 加藤 政也



作名刀展の出品を諦める旨を師匠に言っていました。

師伝の作風に憧れ、その教えを我が物にしようと、必死で作刀に取り組んできましたが、少しも近付くことができません…。

そして今年、師匠から「出品してみなさい」との言葉をいただき、初出品することができ、努力賞に選ばれ、新人賞をいただきました。

そもそも何故、私が刀鍛冶になろうと思ったのか。正直自分でもはっきり

と解っていません。理由は色々あります。「日本刀を作ってみた。作れたらカッコイイな」などといった浅はかなものです。

しかし、刀鍛冶が続いている理由は別にあります。私が出会った多くの先

優秀賞受賞者（撮影・トム岸田）



努力賞受賞者（撮影・トム岸田）



生方や、先輩方を見て思ったのは、「本

当にこの仕事を楽しんでいて、本当にこの仕事が好きなんだ」ということです。私の友人の多くがそうなのですが、自身をしている仕事を好きと思ってる人は少ないように思えます。苦勞をして就職したにも関わらず、多くの友人が愚痴や不満、そして「辞めたい」と言葉にします。

しかし、この業界の人達は違います。誰もが自分の信念を持ち、誇りを持って生きている。

そんな師匠や先輩方に刺激を受けて、自分自身を磨き上げていく。本当に好きと思えて楽しめる、素晴らしい仕事
新人賞受賞者（撮影・トム岸田）



です。

私はこの仕事が好きでたまりません。好きということが、この仕事を続けられる一番の理由です。決して他を否定しているわけではありません。好きだけではやっていけないとも思います。ただ、そう思える仕事に出会えた自分を幸運に思います。

最後になりましたが、吉原義人、義一の両師匠を始め、御尽力いただきました研ぎ師、日刀保の学芸員の先生方、そして日頃から支えてくれている家族、友人すべての方々に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

これからも努力、精進を惜しまず、一層励んで参ります。今後とも御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。
この度はこのような賞をいただき、ありがとうございます。

彫金の部

ひたすら恩師の
足跡を辿る

山下秀文

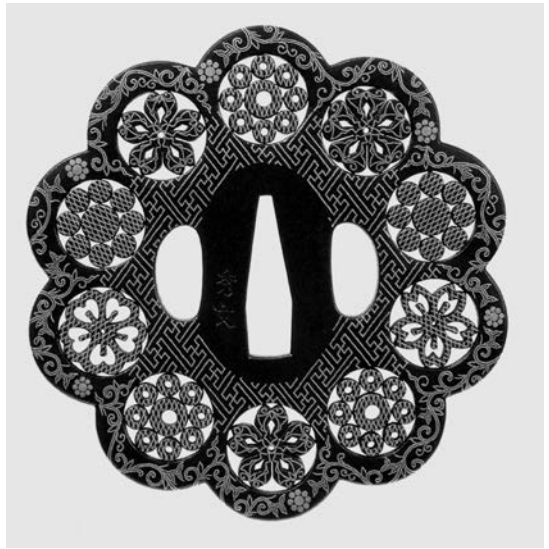
今回の出品作の武鑑透し鐔は、十木瓜形に桜と九曜を交互に並べ製作しま

した。

玉岡俊行先生から厳しく教え込まれた第一の事項は「鐔は刀の外装にかけられるという絶対条件がある」とのこと、この前提条件によって鐔のなかに数々の掟があることを知り、個人の趣味で勝手に基本部分の割合などを変化させるべきではないとのことでした。

特に切羽台は、もつとも注意を要する均衡ポイントであり、江戸以来の掟通り、両櫃鞆に合わせても使用できるような厳しい御指導をいただきました。「永い歴史に培われた鐔には製作上の基本的な掟があり、殊に肥後鐔には肥後の掟と技術がある。この掟の理解と紗綾、二重唐草、枯木など基本的象嵌の修得なくして作られた鐔は、作風混血の鬼子であり、一見外見が如何に美しくとも、決して伝統工芸としての本當の鐔ではなく、単なる文鎮に過ぎない」と淡々と話された先生の御顔と御言葉が、いつも反省材料として脳裏に浮かんでまいります。

鐔の耳の処理についても同様で、何気ないヤスリの一こすりで微妙に違ってきますが、面の取り方について先生は、面の中の面を取れと言われます。二段三段の面取り作業をいろいろの手加減でやっておりますが、なかなか難しく、見えない処には殊に丁寧処理



〔公益財団法人日本美術刀剣保存協会会長賞〕
武鑑透象嵌鐔 愛媛県 山下秀文



〔蕪山賞〕
南無不可思議光如来文字透鐔 静岡県 川島義之

するよう指導されました。

また錆については、昔から錆工の苦心する所ですが、ガンブラックや柿シブで急速に付けた薄い錆では駄目で、一見綺麗に見えても、二、三年で変色してしまいます。鉄の中から湧き出た錆を時間をかけて少しでも厚くさせるため、三年以上寝かせた錆薬を塗りながら熱を加えたり冷却したりの工程を毎日五、六回、一カ月半以上繰り返さねばなりません。

いつも新作名刀展出品前の寒中は、この厚錆の仕上げのため長時間の外出や留守が出来ませんが、厚くて深みのある錆色が出来上がった時は、象嵌が

燦然と輝き出し、厚錆は十年経っても変色せず更に重厚さが増加してきます。

鉄は生きた金属で、永久に変わり続けることですが、錆付けが本当に落ち着くのは四十年後であり、作った本人はその時の鐔の姿や色を見ることが出来ないだろうと言われています。

作者が納得いく鐔は、生涯で一〜二枚と先生は言われますが、小生はその一枚に向かつて今後も永く作り続けていきたいと決意しております。

喧騒の東京から静かな瀬戸内の城下町に戻り、今夜も夜半まで鐔の下図に取りかかり、肥後憧憬の溢れる幸せを感じているこの一刻です。

玉岡先生を始め、諸先生方の御指導を心から感謝し、来年の出品を夢見ています。
(協会会長賞受賞)

錆の手入れ

川島義之

この度は荣誉ある賞をいただき誠にありがとうございます。

思い起こせば、早いもので初出品より今年が三十年目。師について修業したわけでもなく、何も分からず始めた

鐔作りですが、私事ながら、めげずによくやってきたなと感心し、節目の年に特賞をいただけたことに感激しています。

今回の出品作は錆付けを終わり手入れの最中に、耳に小さな鏽傷があることに気付き、出品までは時間がありませんでしたので、全てに砥石をかけ、再度錆付け、手入れをし輝き、落ち着いた黒錆になったように感じられました。

文字透しを始めて二十四年、入選を繰り返し何時かは上位の賞がいただける作品を作ればと思っていましたところ、某氏から地を荒らして錆付けをしているとのヒントを貰いました。当初は理解出来ずいろいろと調べ、地を荒らす必要性が分かり、錆を厚く赤錆を輝きのある黒錆にすることに試行錯誤。失敗を繰り返してきましたが、近年、錆付け、錆付け後の手入れの繰り返しで、思っている輝きのある黒錆とすることが出来るようになってきました。今後も名鐔の錆に一步でも近づく鐔作りに精進していく所存です。

今後なお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。
(蕪山賞受賞)

※掲載作品は『平成27年新作名刀展作品集』から転載